

# 「卒業」ということ 校長 三輪 秀文

私は、中学の時、卒業ということに、さしたる感慨を抱いていなかった。

それよりも、高校のことで頭の中がいっぱいだった。

だから、卒業の日も、同級生だった女子の涙を冷ややかに見つめていた。

日本人ならだれもが迎えるはずの中学校の卒業式なのに、どうして涙なのかと思った。

高校の卒業式には、大学受験のために郷里を離れていて出席できなかった。

卒業式よりも、大学のほうに気がいていた。

先のことばかりを考えて走っていたように思う。

心にはいつも自分のことしかなかったように思う。

出会いとか、恩とかをしみじみ振り返ることがなかった。

いや、振り返ることができなかったというべきかもしれない。

同級生の女子に比べて、精神的にずいぶん幼かったように思える。

それから、十年もしないうちに、私は、中学校で働いていた。

毎年、三月にはきまって卒業式がやってくる。

3年生を担当している時などは、この日のために教師になったのでは、と思ったことさえある。

子どもたちを送り出すその日には、不思議と涙をこらえることができなくなっている。

卒業式が迫ってくると、毎回私は、卒業カウントダウンをていねいに行うようになった。

子どもたちとともに「卒業ということ」の意味をかみしめるようになってきた。

卒業は、出会いとか、謝恩とかいうことをしみじみと振り返らせてくれるのである。

それは、教師と子どもの関係を超えて、すこぶる尊いこころの体験となっている。

少年だった頃の私にはなかった体験である。

私ができなかったことを押しつけるようであるが、いや、できなかったからこそ言いたい。



本校で出会った3年生のみんなには、それぞれの「卒業ということ」を、残された日々の中で、ともどもにかみしめてほしいものである。